

使われなくなった
のこぎり屋根工場
今後を語る座談会

第十二回

報告書

のこぎり座

座談会内容

『ヨーロッパのこぎり小旅行』

日時、平成二十九年八月二十日

午後四時～六時

場所、のこぎり二

一宮市竈屋4-11-3

第十二回のご座 『ヨーロッパのこぎり小旅行』

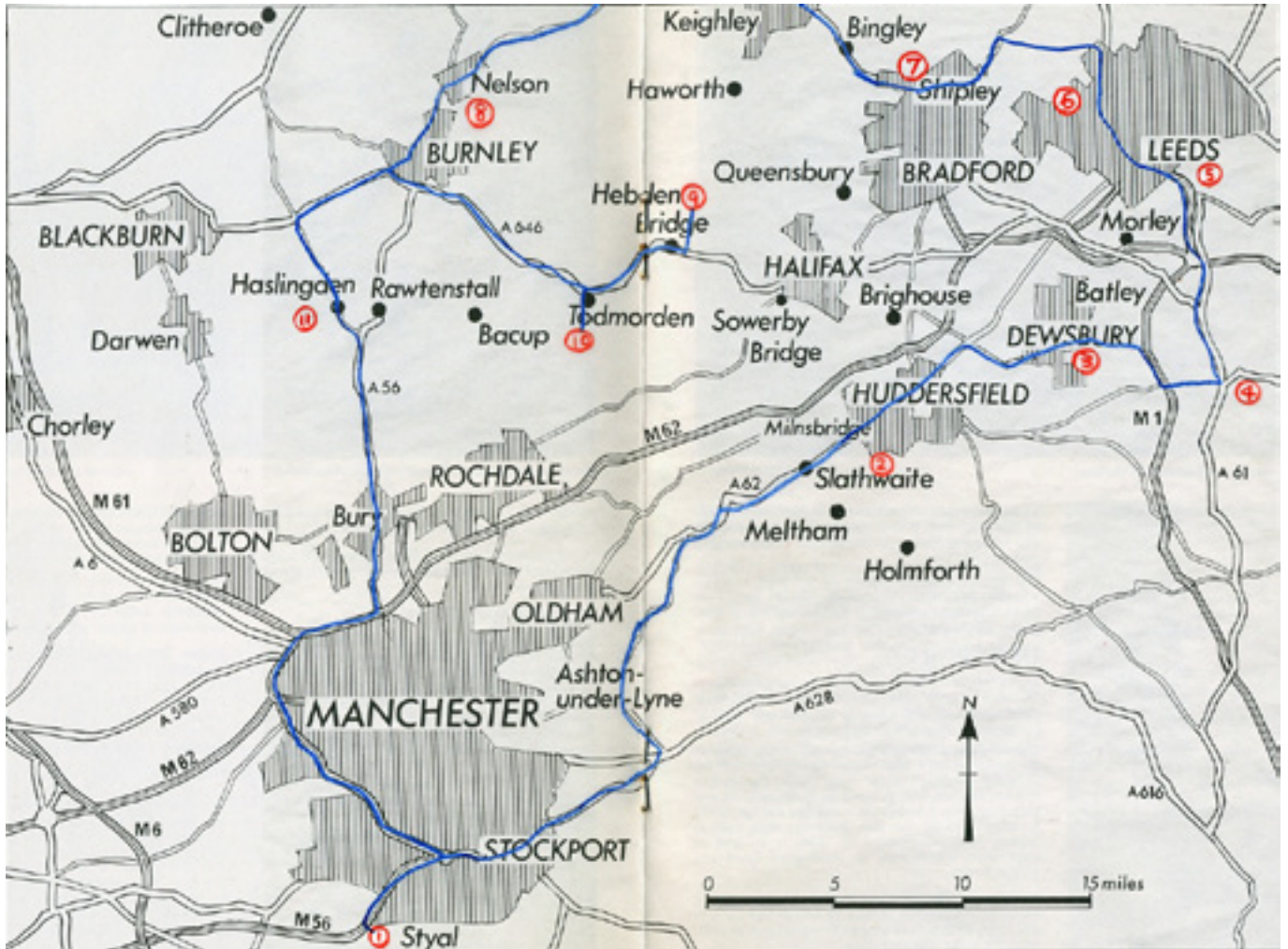
日時 平成 29 年 8 月 20 日 16:00 ～ 18:00

場所 のこぎり二

七月下旬から八月上旬まで、工場を訪ねてイングランド、ポーランドに行きました。今回は現地の写真の紹介と、それぞれの工場の印象を報告をしました。

報告の前に、同じ日に一宮スポーツ文化センターでのこぎり屋根工場の写真を展示されていた林秀樹さんにお越し頂き、展示に関してお話を伺いました。林さんの展示「ノコギリノコドウ」では、二連ののこぎり屋根工場を 108 棟グリット状に並べたものと、工場の内観とそこで働く人が写った大きな写真が展示されています。林さんが撮影された 108 棟の工場では、働いている方の殆どが 70 ～ 80 代で、後継者がいる工場はわずか 4 棟しかなかったそうです。展示のタイトル「ノコギリノコドウ」とは、今まさに消えそうにな織機の音。林さんはその状況を絶滅危惧とも表現されていました。一宮という町の誇れるものを自分の子供達に伝えたいという想いと、このまま終わってほしくないという内心で、この危機的状況を写真を通して告発されています。林さんの写真に写っている工場で働く人々の生き生きとした顔をみると、嬉しい気持ちと寂しい気持ちが、時間を置いてこみ上げてきます。この大切な風景を前に、林さんはどんな想いで写真を撮り、展示をしているのでしょうか。今日の短い時間だけでは計り知れないものを感じました。またいずれゆっくりとお話を伺いたいと思います。





ここからヨーロッパ報告に写ります。イングランドはマンチェスターからハッダースフィールド、リーズ、バーンレイの辺りを約一週間かけて回りました。イングランドの工場は、現地ではシェッドと呼ばれるのこぎり屋根よりも、ミルと呼ばれる複数階の立派な建物が主流でした。繊維業の工場として現役で稼働している工場は訪問できませんでしたが、創業を終わってもまだまだ立派な建物を別の用途で使うという行為は、イングランドでは多くの場所で行われていました。建築の耐久力が十分にあるということだけではなく、一時代を築いた膨大な規模の工場群をとてもしゃないが壊せないのだろうと感じました。その理由は文化や誇りを守るという一面はあると思いますが、もう少しだけた感情というか、生活の中の一つの行為のような、当たり前の流れのように見えました。もしかすると、工場を再生することはイングランドですら始めは邪道な行為だったのかもしれませんが。ただそれを微塵も感じさせないほど、工場は市民の生活や町になじんでいました。

今回の旅の目的は以下です

- ① ノースライトギャラリーのオーナー・マークさんに会い、展示計画を相談すること。
- ② イングランドにあるその他の工場を訪問、情報を収集し、今後のこの座の活動の参考とすること。
- ③ 海外の工場との交流関係を築くこと。
- ④ 趣味。

まずは目的①のノースライトギャラリーを訪れるべくハッダースフィールドに向かいます。その途中、早速工場を見つけたので寄り道をしました。GatleyにあるQuarry Bank Mill。ここは博物館、ショップ、カフェ、住居等として使われていました。水路のある大きな公園の中にあるので、散歩コースや子供の遊び場にもなっていました。昔使われていた糸が、木の糸巻きと一緒に5€で販売されていました。



Quarry Bank Mill

車で少し走るとまた大きな工場があって、入ってみると中が右の写真のようにピカピカでした。天井と床はガサガサでした。ここはいくつものブースに分かれていて、それぞれに別のアーティストが入っていてアトリエやショップとして利用しています。全て埋まっているわけではありませんが、いくつかのアトリエにお邪魔しました。一人のアーティストはこの工場の近所に住んでいる画家で、このアトリエをとて気に入りそうです。彼のアトリエには昔この工場で使われていたものや扉などが飾られていました。彼に近所のオススメの場所や工場を教えてもらいました。後日訪れると、一大観光地でした。繊維産業の勢いが弱くなった今、工場や昔の街並を利用して各地で観光地化が進んでいます。





何もない広原を抜け、ようやくノースライトギャラリーに到着しました。写真でよく見た風景なので、ようやくという気持ちで安堵しました。まずはカフェで腹ごしらえをして、事務所に向かいました。広過ぎて場所が全くわからず、とにかくあった扉をノックすると女性が出てきました。自己紹介をすると、女性は残念そうな顔をして「じつは今日マークの車が故障して…」なんと、マークさんがいませんでした。立ち尽くしていると、その女性は工場の中を詳しく案内してくれました。今ノースライトギャラリーでは、工場を住居にするべく工事を進めているそうです。内部はしっかりと構造補強されており、事業の壮大さが分かります。その計画図面はカフェの入り口にも堂々と掲げられていました。その計画が忙しいということ、また資金面の問題や管理が難しいという理由で、残念ながら現在ギャラリーは閉鎖中だそうです。またいずれ再開するかもしれないが、どうしても一過性になりやすいギャラリーという性格が、マークさんの目指しているものに寄り添えなくなってしまったようです。ハッダースフィールドという地方都市での適切な動き方を長年模索し、実践しているマークさんを見て、一宮での心構えを冷静に考えさせられるひと時でした。

ノースライトギャラリーと平松毛織の昔





Dewsberry Market、Wakefieldをまわり、Leeds（リーズ）という街に到着しました。ここも工場が多く残っている地域です。まず訪れたのがThwaite Millsで、今でも水の力で歯車やベルトが動いている様子が見学できます。中に入るとガタガタ、コロコロ、カラカラと、色々な音が楽しめます。昔ここで働いていた人はいつもこの音を聞いていて難聴になったそうです。一宮の方もそうなのではないでしょうか。水力で動いているということで当然のことながらすぐ側を川が流れています。川の流れを見ながら、歯車の音を聞くことができる面白い工場でした。最上階では、工場の歴史が展示されていました。





次は、工場だけではなく周りの街も作ってしまったSaltさんを訪ねました。看板の絵の人がおそらくSaltさんで、世界遺産にも登録されている地域です。教会等の施設も充実していました。工場も世界遺産の一つですが、歴史等を展示する博物館としてではなく、美術作品が展示されているギャラリー、本屋、レストラン、事務所といろいろな用途で利用されていました。富岡製糸場ではこうはいかないだろうなと感心しながら中の展示を楽しみました。もちろんその工場の文化や歴史を展示することは重要だと思いますが、それに終始しては未来がありません。Salts Millは、先人の作った歴史や建物と同時に、意思や魂もしっかりと後世に伝承されている場所でした。



少し戻ってリーズの郊外にある Sunny Bank Mills を訪ねました。ここも Salts Mill に劣らず大きな工場で、中はギャラリー、アトリエ、ショップ、カフェ、オフィスなど様々。ここまで来るともうどれも同じに見えますが、ここは少し毛色が違いました。リーズという大きな街に近いということもあってか、若々しく活気がありました。受付に座っていた若い女性に工場を案内してもらいましたが、その子はリーズにある芸術大学を卒業して、ここで自分のアトリエを借りながらギャラリーの仕事をしているそうです。なんだか理想の場所ですね。下の写真の女性もショップの定員をしながらこのアトリエで制作活動をしているアーティストです。繊維関係の雑多なものが集まり、どこに何があるか分からない面白いショップでした。





Sunny Bank Mills にはのこぎり屋根がたくさんありました。梁の高さは日本の工場より1～2メートル程高く、かなり広く明るく感じました。窓も日本に比べると大きいです。この写真のスペースは作品の展示をしてるのか、それともアトリエなのか分からないような、煩雑としていてもなお美しい空間でした。雨漏りによって腐敗した壁と大きな窓から見える巨大な緑によって、外部か内部か分からなくなるような魅力的な一角もありました。ただ残念なことに、この建物はもうすぐ壊されるそうです。Sunny Bank Mills では立て続けにのこぎり屋根が壊されています。老朽化により解体するしかないそうです。ミルと呼ばれる複数階の工場よりも、シェッド（納屋）とよばれるのこぎり屋根のほうが、どうしても建物の価値としては小さく見られていて、取り壊しものこぎり屋根から始まります。



しかし解体するに当たって、決して感謝の気持ちをを忘れないようにしているそうです。その思いが地元のアーティスト達を動かし、昨年取り壊しの決まった工場内で大きなイベントが行われました。取り壊しはネガティブに捉えるのではなく、Sunny Bank Mills の魅力をより伝えていく一つの過程だと、40代と50代の従兄弟オーナーが語ってくれました。10年前までこの工場は現役だったそうで、操業停止後すぐに転用を始めたそうです。規模が大きく維持管理費も相当なもので、そうしなければこの工場を守れなかったのだとか。この工場にもアーカイブが展示されています。若手アーティストと場所の歴史が何の依存もなく存在していました。



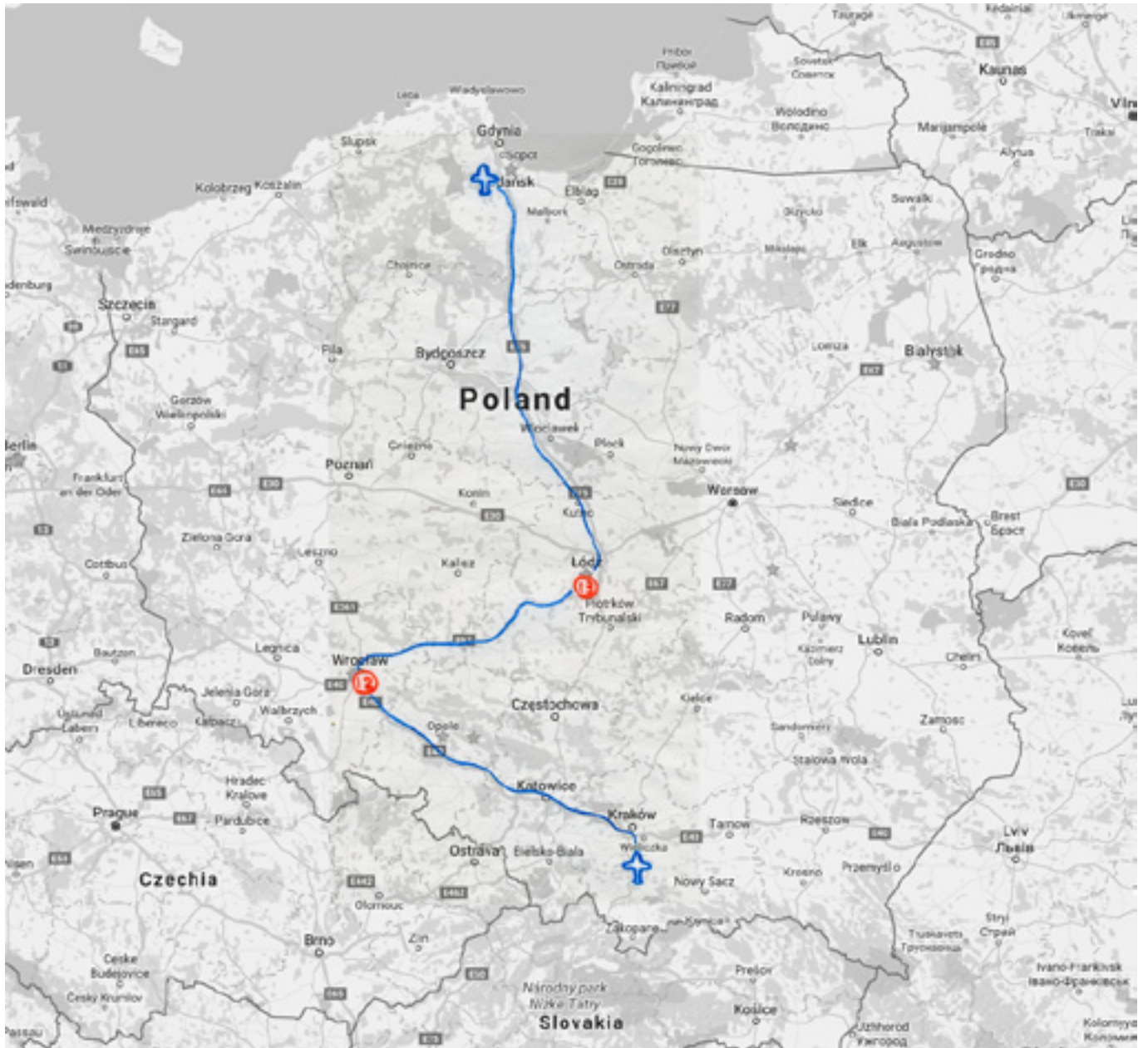


通りがかったその他工場をいくつか紹介します。上の写真は24連ある今回の中では一番連数が多いのこぎり屋根です。三角地に建てられている特異な平面、のこぎりの間隔が短く低い立面が面白い建物でした。石の壁はぼろぼろで、手で抜ける箇所もありましたが表情がとても豊かでした。



中段はHelmshore Mills。左はギャラリー、アトリエ、右は博物館でした。博物館は見た感じ今は運営していません。他の工場でもそうでしたが、行政の援助がないと博物館の運営は難しいようです。援助が再開されれば、博物館も再開するという工場もありました。下の写真はHardcastle Cragという山の中の工場。ここにたどり着くまで山の中を40分程度歩きます。良いハイキングコースです。ここでも工場の歴史が展示してありました。工場を見に来るというよりも、散歩を楽しむ人が多かったです。





ついでと云っては何ですが、ポーランドの工場も見てきました。イングランドのようにしみじみと歴史を感じる工場ではありませんでしたが、とても面白い国だと改めて感じました。

まず最初に訪れたのは、かつて電力会社が所有していた工場を、今では大学として利用している SWPS University。外部内部共に白で統一されていて、電力会社のイメージを少しだけ感じさせるようなすっきりとした空間構成でした。ここも梁までの高さが高いため、中二階が増築されています。ブリッジが効果的に配置され、空間を演出しています。目を惹いたのは白い空間の中で映える蛍光色の芸術作品でした。この大学には美術科はありませんが、別の大学と提携していて、定期的にその学校の作品を展示しているそうです。建物の管理者に平松毛織の話をする、快く大学内を案内してくれました。講堂など気持ちの良い空間で、学生もこの建物を気に入っているそうです。

この町にはもう一つとても特徴的な工場がありました。バスで移動中たまたま発見し、急いで降りて見に行きました。写真を見れば一目瞭然ですので説明は省きますが、のこぎりの形が屋根だけでなく、壁に設けられた窓にも表れています。取り壊して新しくホテルの建設が計画されていたそうですが、反対があり取り壊しを免れたそうです。今は銅のパイプを製造する工場として使われています。イングランドとは違う、スラブ系人種の魅力を強烈に感じる工場でした。









最後に向かったのはウッジという町です。ここはかつての隆盛と衰退、そして新しい大きな波を同時に見て感じることができる町でした。電車を降りると真新しいガラガラの駅。駅の周りの町を歩くと人影がなく、古い建物が並んでいました。他の町とは違った雰囲気です。身の危険すら感じました。どんどん歩いていくとようやく人の生活が見えてきて、その途端大勢の人が寛ぐ光景を目にしました。ものすごい高低差。駅周辺のだれもない町は、かつて工業で栄えた地域でしたが、衰退と同時に人が他の土地に流れからっぽになりました。そこに目を付けた若者が自分の居場所をその町に作り、人の活気が戻ってきました。新しい駅は2020年ウッジで行われる万博に向けて作られたのだと思います。





ウッジでは工場に対する色々な姿勢を見ました。ある工場内博物館の館長さんに近所の二つの工場を教えてください、両方行くことにしました。一つ目は使われているのかよく分からない工場。周りには公園があり、緑との対比と光がとてもキレイでした。

次に訪れたのが MANUFAKTURA。大型ショッピングセンター、美術館、博物館、フィットネスクラブ、レジャー施設、敷地内にはメリーゴーランド。美術館や博物館の内容はとても良かったです。館長さんが嫌いと言っていたのも頷けます。





ウッジに滞在する最後の日、部屋を貸してくれた美術大学の学生が、ウッジで一番おもしろい工場に案内すると言って、もう閉まっている夜の工場に連れていってくれました。そこでは月に数回アーティスト等によるイベントや展示が行われていて、今一番熱い工場だそうです。右の写真はウェブから見たもので、工場空間全体を使ったインスタレーションでしょう。彼もいつかこの工場で展示したいと言っていました。のこぎり二でも展示のお願いをしました。ぼくの知っているポーランド人は「いつか日本に行きたい」と真剣に言ってくれます。彼らが驚くような工場を案内できたら楽しいだろうなと思います。



今回はイングランドだけでなくポーランドの工場も見れたことがとても大きいな収穫だったと思います。そしてそこに関わる人と繋がりをつくれたことは、今後の動きをまた楽しくさせてくれます。参加者の真下さんはイングランド人、ポーランド人両方と仕事したことがあるそうで、「ポーランド人はいい加減だが、最後はとっても楽しかった」と感想を述べられました。

下の写真は、町の中に展示してある工場の歴史の資料です。町の住人はこの展示物をどう思っているか分かりませんが、この展示物は昔の記録を教えるだけでなく、時の変化を示すとても重要なものだと思います。時間が経てば、この資料が掛けられているこの工場の壁も、いずれ無くなってしまいかもかもしれません。参加者の今枝さんは「消えてしまうことを止めるよりも、その消えていく様子が大切」とおっしゃいました。大げさかもしれませんが、この町の展示物は、消え様を如何に見せるか、その準備をしているかのようにも感じてきました。まだまだ消えないものでも、終わりを見据えて進むことは、とても幸せな結果が待っていると思います。

林秀樹さんの展示「ノコギリノコドウ」で野口三郎さんにお会いしました。野口さんは桐生市でのこぎり屋根工場の調査を最初に始めた方です。「北半球ののこぎり屋根は『ノースライトシェッド』と言うが南半球のは果たして『サウスライトシェッド』と言うのだろうか」というのが今抱えている疑問だそうです。「オーストラリアに姉がいます」と返事をしたら、大変喜ばれておりました。分かり次第野口さんにハガキを送ります。まだまだ奥が深い世界ののこぎり屋根です。

最後に、この小旅行の計画を練ってくれたポーラさん、ありがとうございました。

平松毛織株式会社
平松久典

